

■ 書評 ■

佐々木 啓子 [著]

『戦前期女子高等教育の量的拡大過程——政府・生徒・学校のダイナミクス——』

名古屋大学 伊藤 彰浩

女子高等教育の量的拡大プロセスに正面から取り組んだ野心的な書物である。焦点が置かれているのは、主に1920年代から30年代半ばにかけての、著者の時期区分によれば、女子高等教育の「始動」期である。そして、「政府」「学生」「教育機関」という主要アクターを設定し、それらをすべて分析対象として含み込んで、量的拡大をもたらすそれらアクターの相互作用を、「チャータリング」「レジティマシー」「市場」といった概念装置を駆使して「全体的」「構造的」に描き出そうとする。歴史社会学的研究のお手本のような端正な図式に基づいた研究である。しかし、その見事な構成とその中身を、一步踏み込んで検討してみると、いささか問題点もみうけられるように思える。

本書は、序章・終章を含み、全5章で構成されている。評者のコメントを付しつつ、各章の概要を述べよう。

序章では、先行研究の検討を踏まえながら、先述のような分析の枠組みや対象を設定している。しかし、疑問に思ったのは、教育拡大にかかわる教育社会学(およびその近接分野)の一連の先行研究群にそこでまったく言及のないこと、さらにいえば理論・分析枠組みに関する先行研究の検討を欠いていることである。お

そらくそのこともあって、本書の鍵概念である「チャータリング」「レジティマシー」「市場」などの内容ないしは意義、それらの相互関係や分析枠組みのなかでのそれらの位置づけなどがいまひとつわかりにくい。

つづく1～3章では、先述の3つのアクターのそれぞれについて検討される。まず1章では「政府」が取り上げられる。政府が明確な女子高等教育政策を打ち出さなかったこと、そうしたなかで、チャータリングとしての設置認可と職業資格の「無試験検定」認可が政府の行動として重要な意味をもったことが指摘される。しかし、そこでは臨時教育会議での議論などマクロな政策レベルの検討に終始し、得られた結果も概して既存の知見の反復に終わっている。さらに踏み込んで、たとえば各校の設置認可や無試験検定認可の基準やプロセスを丹念に洗い出すことで、政府の方向性(ないしは無方向性)をミクロにあぶり出していくことも可能だと思うのだが。

2章では「生徒」に焦点が置かれる。生徒たちの「進学インセンティブ」の構造を、彼女らの回顧録や出身階層などのデータをもとに検証しており、「文化資本形成」「職業資格取得」といった手段的価値のみならず、「学校的価値の自明化」、

進学自己目的化といった、生徒にとっての進学の意味が「重層的に展開」している様が描かれる。ここでの議論はなかなか刺激的である。しかし、女子英学塾や東京女高師などの伝統校の資料に主に依拠した分析で、大衆化の「始動」期に関する結論が出せるのか疑問であるし、著者の考えるストーリーが先にあって、そこに資料を当てはめていったかのような、解釈の強引さを感じさせる箇所も目についた。

3章では女子専門学校の個別の行動が分析され、十数校のケース・ヒストリーが展開する。90数頁におよぶ、本書で最大部分を占める章であるが、そこでの結論は女子専門学校が「中等教員無試験検定」を軸として展開した」ということにはほぼつきる。各校でみられたドラマの叙述はなかなか興味深い。しかし、とりあげられたケースの選択基準は明確でなく、さらに、資料の限界によるのだろうが、各校の記述項目のばらつきも大きく、そしてしばしば、その叙述は必要以上に冗長に思える。また、各ケース・ヒストリーは、最初から無試験検定資格の獲得を中心に組み立てられているようにみうけられ、結論が分析に先行している印象をここでも受ける。

終章では、3つのアクターの相互交渉を描きつつ、拡大メカニズムの図式化が試みられる。その要点は、①政府によるチャーターリング＝設置認可・無試験資格認可による学校と進学者へのレジティマシー＝社会的正当性の付与、②無試験検定認可にともなう組織的「相同化」と女子専門学校システム全体の強化・拡大、

③進学動機における「職業準備」と「文化資本形成」の連結関係の形成にともなう進学インセンティブの強化、といったメカニズムが、時期的には、「拡大の始動期」(1920-34年)に進展し、さらにその後の「加速」期(1935-45年)にさらに促進され、その結果として進学が自己目的化し、システムが「自己強化的」に拡大する、ということである。見事な図式化であるが、他面でその図式がそれ以前の章での実証分析によって十分に裏打ちされたものなのか、これまでも述べたように疑問を感じる。実証的に十分検討されていない時期(「加速」期)についての図式まで提示されているのは勇み足であろう。

全体的にみて、序章や終章で展開されている図式は、大胆で魅力的ではあるが、足が地についていない印象をもつ。実証分析がおうおうにしてその図式に込められたストーリーに引きずられている。「中等教員無試験検定」のみを分析軸としてしまうことで、おそらくもっと多様な側面をもった女子専門学校の拡大メカニズムの姿をゆがめてしまうことになったのではないかと気になる。

以上いささか問題点ばかりを強調するような書き方になってしまったが、これまで本格的にわが国の事例について試みられたことのない相互作用論的アプローチによる教育拡大研究の試みであり、研究の乏しい戦間期を対象とし、しかも(評者も大いに自省を込めて述べねばならないが)いまだ研究者の視野の周辺におかれがちな女子の教育を本格的に扱った研究としての本書の価値は、いくら強調し

てもしすぎることはない。

◆ A5判 264頁 本体6,800円
東京大学出版会 2002年1月刊

■ 書評 ■

玉井正明・玉井康之 [共著]

『少年の凶悪犯罪・問題行動はなぜ起きるのか』

——事件から学ぶ学校・家庭・地域の役割とネットワークづくり——

大阪大学 池田 寛

1. 役立つ情報をコンパクトに

本書は四六判234ページのコンパクトな書物である。大きく三つのパートからなり、第一の「I 衝撃の少年凶悪事件から学ぶもの」は、1997年の神戸の児童連続殺傷事件をはじめ、ここ数年のあいだに発生した全国の青少年凶悪事件を紹介している。第二の部分である「II 少年犯罪の社会的背景と前兆的行動」は、少年事件をもとにその社会的背景にせまるとともに、凶悪行動に走る前兆となるサインを指摘している。第三の部分である「III 少年犯罪・問題行動の防止と自己統制力を育む学校・家庭・地域の対応方策」では、青少年の問題行動に対する家庭、学校、地域での対応の仕方を具体的に提案している。

情報が要領よく整理されていて、コンパクトということばがまさにぴったりの書物である。目新しい知見がそれほど多いというわけではないが、著者たちはこれまで知られていることを丹念に紡ぎ合わせ一冊の書物にまとめている。青少年問題、非行対策などについて考えるときに参考になる知識と情報が過不足なく盛り込まれている。私はときどきかばんの中に入れて電車の中などでこの本を開く

が、そのたびに「なるほど」と思うような情報や知見に出くわす。何度も読み返すことによってその価値が増してくる類の本であり、教師や非行予防、青少年育成関係者、さらに保護者にとって、本書は問題の捉え方だけでなく、現実の問題への対処の際の指針をも提供してくれる心強い味方となるのではないだろうか。

読者にとって情報を使いやすいかたちで整理しようという本書の姿勢は、たとえば分量的に本書の半分を占めるI部に端的に現れている。I部では、神戸の児童連続殺傷事件以後起きた青少年による凶悪事件を取り上げ、事件の経過や犯人の人物像、家庭背景などを紹介している。私も個々の事件のすべてをテレビや新聞の報道でそれなりに知っているのだが、傍観者的な情報摂取にとどまっており、事件の全容は言うまでもなくその輪郭や流れもあいまいにしか認識していないものが多かった。一つ一つがあいまいな認識にとどまっており、さらにそれぞれがつながりを持たず断片的である場合には、知識や事例がいかにも多くてもそれらは意識の表層を横に移動するだけで、意識の深いレベルを刺激することはない。ある出来事に興味や関心を持ったり、こ